Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

「オープン形式での保育研究」 －自ら環境に関わり意欲的に遊ぶ子ども－

○飯田稔子　掛太恵子　小林貴子
（西宮市立瓦木北保育所）

[研究目的・方法]

当保育所は１９９９年４月に改築され、施設全体がオープンな造りになっている。2 階保育室は各クラスの仕切りがなく、可動式のロッカーによって区切り、３・４・５歳児が生活や遊びを共にしている。１階の０・１・２歳児クラスも仕切りに壁がなく、強化ガラスの戸で仕切り、開閉出来るようになっている。このオープンスペースの保育環境を生かし、年齢枠を外した保育の取り組みの中で主体的に環境に関わり意欲的に遊ぶ子どもを育てていきたいと願い、保育してきた。今回は、１９９９年から現在までの３・４・５歳児の保育の取り組みと考察を報告し、今後の保育の向上につなげていきたい。

[実践]

この環境をどのように生かして、子どもの主体性を大切にする保育を進めていけば良いか、話し合いを重ね、『年齢枠を外した保育の取り組みの中で、自然な形での異年齢児の関わりや友達関係を深め、主体的に環境に関わる経験を積み重ねていくことで、子ども達一人一人の生きる力の基礎を培っていきたい』と考えた。そして 1.自ら環境に関わり意欲的に遊ぶ子どもを育てる、2.自分で考え行動出来る子どもを育てるをねらいとし、現在まで取り組んできた。

1.自ら環境に関わり意欲的に遊ぶ子どもを育てるについては、自分でしたいことを選び遊ぶことにより、「もっとやりたい」と思えることを見つけ、じっくり取り組むことが出来るのではないかと考え、応答的な環境の工夫をした。最初は今使っていた物を持って別の遊びの場所へ移る、そのままにして次の遊びをする等の姿が見られた。子ども達が集中して取り組むことが出来る場の環境作りとして、

◇やってみようと思うように・・取り出しやすいように並べたり置いたりする。

◇自分で片付けるように・・置き場所を固定し、見出しをつけて分類をわかりやすくする。

取り出しやすく片付けやすい、その場所で使う物をその場所に置く等の配置に工夫をし、動線にも気を付け保育士も一緒に遊んで使いながら、より良い方法を考えていった。また、玩具が１つでもなくなったら皆で探し、なくなったままでは使わないということを大切なルールとし、皆の物を大事にすることを伝えている。したい遊びの見つからない子どもには、何をしたいのか問いかけ、一緒に探し、遊ぶことでその楽しさを知らせ「もっとやりたい」と思えるような援助をするように心掛けている。ままごと、構成遊び（レンガ積み木・動物積み木）、絵を描く、折り紙、粘土、絵本、ゲームやパズル等それぞれのコーナーは、好きな時に遊ぶことが出来るように常設にし、子どもの様子を見ながら増やしたり取り替えたりしている。

保育士の意図した遊びでは、自分で「やってみよう」と思えるように人的・物的環境の工夫をし、一人一人の子どもが主体的に関わることが出来るように、期間に余裕をもってすすめている。また、「もっとやりたい」という次の段階への適切な援助が大切であり、一人一人が満足するまで取り組めるような場を設けている。

2.自分で考え行動できる子どもを育てるについては、一人一人が自分で選び決定していくという経験ができるように、様々な場面で選択肢を用意してきた。年度初めの３歳児については新しい環境となる為、１ヶ月程は担当の保育士と３歳児で過ごす時間を多く作り、幼児クラスでの生活の仕方や玩具の使い方・片付け方を丁寧に知らせていくようにしている。その間は一定時間室内で過ごし、皆で片付けてから園庭に出て遊ぶという限定された形の中ではあるが、選んで遊ぶことが出来るような工夫をしている。自分の思いで選び決定することは難しく、最初はなかなか自分で決められなかったり、「～していい？」と尋ねる子どもが多かった。そこでその気持ちを受け止めながら大人が答えを出してしまわず、どうしたいのか尋ね、一緒に考えながら、子どもが自分で考え決定するという機会を重ねていくようにしていった

また、集団の場である環境を生かし、人との関わりや友達とのつながりを深めていく遊びとして、集団遊びやルールのある遊びを異年齢の友達と一緒に年間通して取り組んでいる。

＜事例＞　運動会への取り組みの中で

子ども達と相談して、５歳児単独の種目の１つに竹馬かバランスのどちらかを選んでしようということに

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

なった。竹馬をしたいがうまくいかず、それでも「やりたい」と思うA児。その気持ちを認め、一緒に目標を決め取り組んだ。午前中は1歳児等の小さい子ども達も園庭を使うので、竹馬は午後の5歳児だけが起きている時間の遊びとしていたが、朝から「竹馬したい」と言う子ども達の気持ちを受け入れ、保育士間で連携を取り、安全に気を付けてやりたい時に出来るように場所を設けていった。「タイヤにのってから、たけうまにのるとやりやすいで」、足の皮が剥けて痛くてもう出来ないという友達に「わたしもはじめそうなったけど、がんばってつづけたら、のれるようになったよ」と励ましあい、気付いた事を知らせ合う姿が見られた。その様子を見て「らいおんぐみさんってすごいなー」という3・4歳児の声。それに励まされて気持ちが一層高まった。また、5歳児の担当者だけでなく他の保育士からも認め、励まされ、何度も何度も繰り返しチャレンジする姿がA児を始め5歳児に見られた。

年齢毎の担当保育士は決めているが、担当者全員で幼児クラスの子どもを見ていくことを確認し、チーム保育をすすめている。子ども達にもそのことを伝え、クラスの枠をはずして子どもも大人も関わる、困ったときには傍にいるどの大人にも頼れるような関係を築くことを大切にしてきた。基本的に年齢枠を外した保育形態なので、室内や園庭を遊びの内容によって幾つかのエリアに分け、保育士一人一人は自分のエリアに来た子どもを責任を持って援助していくようにしている。それぞれのエリアの子どもの様子を報告し合う中で、一人一人の様子を把握し援助について共通理解するようにしている。その為に話し合いは不可欠で、毎週一回1時間、月に一度は3時間の幼児会議を持っている。また、幼児会議は午後の保育の時間帯で、未満児クラスからの応援があり職員集団の協力の下に成り立っている。

また各エリア毎に子ども達がその遊びにどのような参加の仕方をしているか簡単な記録をとり、適切な援助や今後の計画の進め方を考える時に役立てていたが、今一つ活用出来ずにいた。そこで、昨年個人記録とエリア毎の記録をつけるようにした。個人記録は一人一人の遊びの興味や発達面等の具体的なことを記入している。エリア記録は担当するエリアの子どもの様子や保育士の援助を、子どもの主体性、遊びへの取り組み方、考えたり工夫している場面、友達との関わりについて等、共通の視点で毎日経過を追って記入するので、援助の仕方の移り変わりや遊びの発展していく様子がよくわかるようになった。

[結果 及び 考察]

現在の保育形態を始め5年が経った。事例にもあるように、5歳児になると、それぞれの目標を持ち意欲的に取り組む姿や話し合いを通して皆で考え子ども達自身で決めていく姿が見られる。これまで選択肢のある環境の中で、自分で考え選んで決めるという経験を積み重ねてきたことが、様々な場面で一人一人が育んできたものを発揮出来る力となっている。ぶつかり合い、協力し合いながら、自分の思いを伝え、友達の気持ちや関わり方に気付き、主体的に遊びをすすめていく姿や、期間に余裕を持ち継続した取り組みの中で、興味が深まり自分で考え工夫した事を伝え合う姿も見られる。また、生活・遊びを共に過ごしてきた3・4・5歳児の中には深いつながりが見られる。4・5歳児は自分達がしてもらった経験から、困っている3歳児の手助けをしたり、5歳児が身に付けた様々なことを3・4歳児に伝える姿等が日常の中で、ごく自然に展開され、時には3歳児の気付きに、5歳児が共感し遊びが発展していくような場面もある。言語面でも、互いに理解する為にわかりやすい言葉に変えたり、じっくり聞こうとする姿等、異年齢の関わりの中で身についた言葉が豊かに育ってきているように思う。

チーム保育では、思い悩むことがあった時にも、皆で考えることにより様々な角度から捉えることが出来、より良い援助を見つけるきっかけとなっている。それは子どもにとっても様々な保育士の個性に出会うことが出来、より良い声かけ、対応、援助を受けることとなる。意見の違いもあるが、話し合いを重ねる内に互いの思いが理解出来、自分とは違う捉え方や見方を学んだり、日々の保育の中で他の保育士の自分とは違う援助や対応の仕方を見ることが出来る等学びが多い。

[まとめ]

年齢枠を外した保育の中で、子ども達は異年齢や同年齢の子どもの関わりを通して、自らの思いを伝えたり、友達の思いに気付き、私達保育士は子どもの思いを温かく受容し、一人一人が大切だということを伝えてきた。そのことにより、将来自分や他人を大切にする心が育っていくと考えている。そして、子ども達一人一人が主体的に環境に関わり自分達で遊びを選び、遊びこむことで様々なことに気付いたり、考えたりするようになり、困難なことにも立ち向かう生きる力が培われるようにと願っている。今後もこのオープンな施設を生かし、子ども達が生き生きと活動出来る環境の工夫と保育内容の充実の為に、個々の保育の専門性、チーム保育の専門性を高め、日々研鑽していきたい。

NII-Electronic Library Service